

オタワのまちづくりとリドー運河

企画調査部 副参事 石垣勝之

1. はじめに

平成4年7月17日から8月1日にかけて、カナダのまちと水辺を視察する機会を得た。今回の調査は、トロント、ケベック、オタワ、カルガリー、バンフ、バンクーバーへとカナダを東から西へ横断するような形で、各都市におけるまちづくりと水辺、特にサイクリングロードについて実際に自転車で走るにより整備状況及び利用状況の調査を行ってきた。ここでは、紙面の関係上、私が一番感銘を受けたオタワについて述べることにする。

2. オタワのまちづくり

“カナダ”という名前は、英国領植民地のひとつ「カナダ植民地」につけられた名前で、今のオンタリオ州とケベック州がこれに含まれていた。そして、1841年にオンタリオ州のキングストンにカナダ植民地の首都が置かれて以来、めまぐるしく首都が変えられてきたが、1857年、英国のビクトリア女王がオタワを統一カナダの首都に選定した。その理由はフランス系のケベック州とイギリス系のオンタリオ州の接点に位置していたからということで、両文化のかけ橋となり、多民族国家のカナダを見守れるようにと、願いがこめられているとのことである。そして、1867年、イギリスから自治権を与えられカナダ連邦が成立し、同時にオタワも一国の首都になった。

1900年、オタワは大火にみまわれ、まちのほとんどが焼失した、しかし、これをきっかけに、工場のスモッグや都市の喧騒とは縁のない「理想の首都」への歩みが本格的に始まり、1930年代には自然と調和した美しい都市を目指して、公園や川岸の整備などが急速に進められてきた。

さらに、1960年代には、カナダの国家意識の高まりとともに、国立博物館や美術館の建設、拡張が行われ、文化面でも首都としての成長が促進されてきた。



写真－1 オタワ川河岸にそびえ建つ国会議事堂

オタワに入ってまず目に付くのは、オタワ川の崖上に堂々とかまえている国会議事堂である(写真－1)。朝一で見に行ったので、運がいいのか騎馬隊警察の衛兵交替式を見ることができた。赤いジャケットに黒い毛皮帽、りりしい衛兵たちがエルゴン通りを行進する様は、まるで歴史が蘇ったようであった。また、「ミュージアムの街」といいほどいたるところに博物館や美術館があり、国際レベルの知的文化も楽しめる街でもある。そして、ゆったりとしたプロムナードや広場が各所に設けられ、街全体が公園のように美しく手入れされており、自由気ままにくつろげるような街である(写真－2)。



写真－2 オタワのまち

2. リドー運河

リドー運河は、オンタリオ湖岸からオタワ川までの約200kmにわたって流れている運河で、英国植民地時代に、英国側がアメリカに近すぎるセント・ローレンス川に代わる水路として、1826年から6年がかりで造られた。

現在、リドー運河はオタワの市街部を流れており、川岸には、サイクリングロードや花壇の続く散歩道、公園等が整備され、市民の憩いの場となっている(写真－3)。ま



写真－3 市街部でのリドー運河

た、冬には世界一ながいアイス・リンクに変身してスケートが楽しめるとのことである。

私は、このリドー運河沿いからガディーノ丘陵地帯に整備されている北米有数のサイクリングロードを実際に自転車で走ってみることにした。まず、驚くのは、サイクリングやジョギングを楽しむ人の多さだった。若い人からお年寄りまで自分のペースで実に楽しみながら走っているのである。そして、川岸に続く花壇、樹木の多さだ。この水際の色鮮やかな樹木群をくぐり抜けるようにサイクリングロードが走っており、また適度に起伏や蛇行があり走っていて全くあきない(写真-4)。極め付けは、時折捨石護岸



写真-4 リドー運河沿いを走るサイクリングロード

の石の間から顔をのぞかせるリスが心を和ませてくれる、まさに都会の中のオアシスである。この他に、オタワ川合流部では、オタワ川とリドー運河の水位差を調節するため8基の水門を設置して船がスムーズに通れるようになっており、船が通る度に、水がアップダウンする様子を見物する人も多く、1つの観光拠点となっている(写真-5)。ち



写真-5 オタワ川合流部の水門

なみに、水門の開閉はすべて手動であり8基すべて終わるのに30分以上の時間がかかっていた(写真-6)。また、街の中心部では、主に川岸に散策道の整備が行われ、所々しゃれたレストランもありビールを片手にくつろいでいる人も多い。

このように、リドー運河は、オタワ市民にとって切っても切り離せない大切な存在であり、この水が街に優しいう



写真-6 水門が開くのを待つボート

るおいを与えてくれるとともに、四季の移ろいを感じさせてくれるものであることがうかがえた。

実は一つ怒られた事があったのだが、私も、この素晴らしいサイクリングを楽しんでいた時である。突然前から走ってきた人が何やら怒鳴りつけて私をかわして通り過ぎていった。何が起ったのかわからなかった私は、そこに立ち止まって他の人を見てみると、何とみんな右側を走っているのである。そのために、センターラインが引かれてあり、自転車も自動車同様に右側を走らなければならなくあちこちに自転車用の標識や矢印が示されてある。このことから、サイクリングを楽しむ人の多さがうかがえた。

3. おわりに

長期都市計画の努力によって生み出された「理想の首都」オタワは、まさに洗練された街であり、これに街づくりの骨格としてリドー運河が非常に重要な役割を担っていると思われた。我が国とは、生活・文化が全く異なり、また水辺空間がおかれている自然的、社会的条件が異なっているが、良いものは良いということを認めた上で、どのような水辺空間を作っていくかを考え直すことが必要であると思う。